〔原 著〕

援助がもたらす自尊心への脅威が 被援助者の反応に及ぼす効果¹⁾

西 川 正 之 高 木 修
大阪教育大学 関西大学

Effects of threat to self-esteem on recipients' reactions to help

MASAYUKI NISHIKAWA (*Osaka University of Education*) OSAMU TAKAGI (*Kansai University*)

The purpose of the present study was to examine the effects of controllability, social proximity, and recipient self-esteem on recipients' reactions to help. Five hundred students were asked to place themselves in the role of a hypothetical help recipient and to answer a series of questions regarding their reactions to help.

As predicted, results indicated that to a significant degree recipients in high controllability condition attributed causes of receiving help more to themselves, and engaged in more self-help, than recipients in low controllability condition. It was also found that recipients who were helped by intimate friends felt more negative affects than those who were helped by acquaintances. These results were consistent with our predictions.

Contrary to expectations, effects of social proximity on the recipients' positive affects and self-help efforts were not found. Furthermore, effects of recipient self-esteem on their negative affects and self-help efforts were not observed in this study. Overall, hypotheses based on the threat to self-esteem model received partial support. The conceptual implications of the findings were discussed.

問 題

援助行動研究の多くは、援助行動を促進する、あるいは抑制する要因の解明を目的に行われてきた。しかし近年、援助者ではなく、援助される人、つまり被援助者の観点から援助を捉える研究が増えてきている。通常、愛他的に行われる自発的な援助は、その受け手に好ましい効果をもたらすと考えられる。しかし被援助者にとって、援助がいつも肯定的な意味だけをもつわけではないことがいく人かの研究者によって明らかにされている (Walster, & Berscheid, 1978; Greenberg, 1980; 相川, 1984; 西川・高木, 1986)。

Fisher, Nadler & Witcher-Alagna (1982) は、援助に対する被援助者の反応に関する従来の研究や理論を展望して、自尊心脅威モデルという新しい概念的枠組を提案し、被援助者の反応を説明する従来の諸理論を包括しようとした。この自尊心脅威モデルは、援助を受けることが自己に対して肯定的、支持的な効果と否定的、脅威的な効果の双方を生み出すことを前提にしている。そして援助が被援助者にとって支持的となるか、それとも脅威的となるかは、援助行為自体に含まれる意味、社会化の過程で獲得した価値観、あるいは援助の特性などによって規定されるとした。例えば、援助が援助者の被援助者に対する憐れみや軽蔑を意味する時、また援助が社

1) 本論文における調査は、高木の指導の下で、関西大学社会学部の昭和63年度卒業生加藤陽子氏が、卒業論文研究のために実施した。

会の中で本来望ましいとされている自立に失敗したことを意味する時、あるいは援助を受けることがあまり有益な結果とならない時に、援助は脅威的になる。つまり、援助は被援助者にとって自己支持的要素と自己脅威的要素をともに含むが、特に自己支持よりも自己脅威に繋がる要素が顕現的であるこのような場合、被援助者はその援助を自尊心に対して脅威的であるとみなす。要するに、自己支持的援助の受け手は肯定的に自己を認知し、援助や援助者を好ましく評価し、さらに援助されることを喜ぶといった非防衛的反応を行うが、他方、自己脅威的援助の受け手は自己や援助および援助者を低く評価し、防衛的にふるまうとしている。

Fisher らのモデルは、他の社会的行動の理論を被援助者の反応の説明に適用しようとする従来の考え方とは異なり、援助への反応を特に説明するために展開されたモデルである。このモデルは、被援助者が援助を必要とするに到った原因の統制可能性の知覚や、その苦境を積極的に解決していこうとする動機を、被援助者の反応を規定する重要な変数として位置づけるとともに、被援助者の反応を短期的反応と長期的反応とに分けて予測するなど、被援助者の反応過程を幅広く捉えている点に特徴がある。さらに、彼らのモデルは、苦境に立つ人（潜在的被援助者）の援助要請行動をも説明する理論的広がりを持っており、被援助者の行動の理解の新たな枠組みとなっている。しかし、自尊心への脅威を中心にしたこのモデルによって、どの程度まで被援助者の否定的反応を捉えうのかについては未だ十分に議論されたとは言えない。さらに、わが国においてこのモデルの妥当性を実証的に研究したものはほとんどない。そこで本研究では、我が国における自尊心脅威モデルの有効性を検討する。ただし、このモデルは、援助者、援助状況、および被援助者の特徴などを先行条件とし、援助が自己脅威的な場合と自己支持的な場合とで、援助要請行動や援助に伴う被援助者の感情反応がいかに異なるか、さらには被援助者の自助努力や援助者への反応がいかに相違するかを予測するという、被援助者のかなり広範な反応を捉えたモデルである。したがって、モデル全体を本研究だけで検討することはできない。本研究では特に、援助を受けずに苦境を乗り切ることができるかどうかという事態の統制可能性、援助者と被援助者の間の社会的近接性、そして被援助者の自尊心の高さの3観点から、自尊心に脅威的な被援助経験が、援助原因の帰属や被援助者の感情反応、そして後の自助努力に影響を及ぼす過程を中心に、検討を加える。

Nadler & Fisher (1986) は、援助が被援助者にとつ

て支持的であるか脅威的であるのかの問題に加えて、援助を必要とするに到った原因の統制可能性の観点からも、被援助者の反応を検討した。Nadler らは、援助や援助者に対する被援助者の反応や自助努力に及ぼす統制可能性の認知の役割を強調し、たとえ自己脅威的援助の受け手であっても、自らが置かれていた事態を統制可能と認知したかどうかで被援助者の反応は異なると考えた。つまり自己脅威的援助を受けた者の中で、援助を受けた状況を本来統制できたものと認知した者は、援助を受けた原因を、自己の能力不足ではなく努力不足に帰属し、一時的に自己や援助者に否定的な感情を抱くとしても、以後は自分で苦境を乗り越えようと動機づけられる。他方、自己脅威的援助を受け、その状況を統制不可能だったと認知した者は、援助を必要とした原因を自己の能力不足に帰属し、自己や援助、さらには援助者に対して否定的感情を抱き、かつ後の自助努力も小さい。

援助者と被援助者の間の社会的近接性 (social proximity) は、援助が自己脅威的になるか、それとも支持的になるかに影響を及ぼす (Nadler, Fisher, & Ben-Itzhak, 1983)。Nadler & Fisher (1986) は、彼らの過去の実験研究を紹介する中で、社会的に近接した人からの援助は、一般的に自己脅威的であると考える。Nadler ら (1986) によれば、人は見知らぬ人よりも友人を一層自分と類似した存在として認知しやすく、それゆえに人は友人を見知らぬ人以上に社会的比較の対象にすることが予想される。したがって援助を受けることが自分の無能さを表すことになる状況では、被援助者は見知らぬ人からよりも友人から援助されることで一層強い比較ストレス、つまり、自分の努力や能力が援助者のそれらよりも劣っているということを一層強く感じやすく、友人からの援助を一層強く自己脅威的に捉えたと考えられる。しかし、Nadler ら自身が述べているように、社会的に近接する人からの援助が自己脅威的であるか、それとも自己支持的であるかを予測することは、決して単純なことではない (Nadler, Fisher, & Ben-Itzhak, 1983)。すなわち、友人からの援助が、社会的近接性の低い他者からの援助に比べて、被援助者に一層つらさを感じさせることもあれば、逆にうれしさを感じさせることもあると論じている。彼らの研究結果では、自我に関連した事柄もしくは自己概念の中心に位置する事柄について、友人から援助を受けた時に、被援助者はより強い否定的感情を抱くが、中心的な事柄でなければ、社会的に近接した人から援助を受けた場合に、一層強くうれしさを感じていた (Nadler, Fisher, & Ben-Itzhak, 1983)。この結果は、援助の自我関与度が高い場合、友人からの援助は自

己脅威的になるが、自我関与度が低い場合、友人からの援助のほうが、見知らぬ人からの援助に比べて一層自己支持的であることを示している。また社会的近接性は、統制可能性と交互作用して、自助努力に影響することが明らかにされている (Nadler & Fisher, 1986)。すなわち、統制可能な場合に友人から援助を受けた被援助者は、他のあらゆる条件の場合よりも、特に多くの自助努力を試みた。これは、統制可能性の高い状況での友人からの援助が、一層自己脅威的であり、それゆえに被援助者は後の自助努力を高めることによって依存からの独立を目指したことを示している。統制可能性が高い場合も低い場合も、短期的にはいずれも自己や援助者そして援助に対して否定的感情を引き出すが、自助行為や後に行われる援助要請行動においては両者間に大きな違いがあると考えられ、その差異は援助者と被援助者との社会的近接性によってさらに強調されるようである。

被援助者の自尊心は、援助が自己脅威的であるか、それとも支持的であるかの認知に影響を及ぼす (Nadler & Fisher, 1986)。従来の自尊心理論の研究からは (例えば, Coopersmith, 1967), 自己を高く評価する者は、自己を低く評価する者よりも、好ましい自己態度を維持し、侮蔑などから自己概念を防衛するよう強く動機づけられることが明らかである。Fisher らのモデルでも、基本的には従来の自尊心理論と共通の枠組みで自尊心が捉えられており、特に、援助されることが自己概念の中核に関わる時、自尊心の高い者は一層強い否定的な感情を経験すると仮説されている。

また自尊心の高い者は内的帰属傾向が強い (internals) という指摘もある (鹿内, 1978)。したがって、課題を他者の力を借りて解決したという事態に直面すれば、自尊心の高い者は、他者から援助を受けたことの原因を不安定で内的な要因である自分の努力不足に帰属し、自尊心の低い者よりも一層強い自己脅威を経験すると考えられる。

また自尊心の高低は、援助者と被援助者の類似性と交互作用して、特に興味深い効果を生み出している (Nadler, Fisher, & Streufert, 1976)。すなわち、Nadler ら (1976) によれば、自尊心の低い被援助者は、援助者との類似の程度にかかわらず、援助を受けるほど肯定的感情を抱いたが、自尊心の高い被援助者の反応は複雑であった。つまり、自尊心の高い被援助者は、自分と類似した相手からの援助を脅威的に感じ、否定的感情を抱くが、類似していない相手からの援助は支持的に感じ、肯定的感情を抱いたのである。ここで、人は見知らぬ人よりも友人を一層自分に類似した存在として認知するとい

う従来の知見 (Nadler & Fisher, 1986) に基づけば、援助者と被援助者の間の類似性は、両者の社会的近接性と強く関連するものと考えられる。したがって、Nadler ら (1976) の実験で操作された態度の類似性を援助者と被援助者との間の社会的近接性に置き換えて考えれば、自尊心の高い者が友人から援助を受けた時、自己脅威の程度が極めて高くなることが予測できる。

以上の議論に基づき、本研究では、大学生を被験者にしたこれまでの研究を参考に、自己概念の中核に近い能力に関する援助状況を設定し、以下の仮説の検証を試みた。

仮説 1 統制可能性が高い状況で援助を受けた人は、それが低い状況で援助を受けた人よりも、援助を必要とするようになった原因を (a) 自己の努力不足に帰属する傾向が一層強く、(b) 自己の能力不足に帰属する傾向が一層弱いだろう。そして、前者は後者よりも被援助によって (c) 一層強い否定的感情と (d) 一層弱い肯定的感情とを抱き、また、援助者に対して (e) 一層非好意的な感情的態度と (f) 一層低い評価的態度を抱くだろう。したがって、このような体験の後 (g) 一層大きな自助努力を行うだろう。

仮説 2 友人から援助を受けた人は、知人から援助を受けた人よりも、援助を必要とするようになった原因を (a) 自己の努力不足に帰属する傾向が一層強く、(b) 自己の能力不足に帰属する傾向が一層弱いだろう。そして、前者は後者よりも被援助によって (c) 一層強い否定的感情と (d) 一層弱い肯定的感情とを抱き、また、援助者に対して (e) 一層非好意的な感情的態度と (f) 一層低い評価的態度を抱くだろう。したがって、このような体験の後 (g) 一層大きな自助努力を行うだろう。

仮説 3 自尊心の高い被援助者は、自尊心の低い被援助者よりも援助を必要とするようになった原因を (a) 自己の努力の不足に帰属する傾向が一層強く、(b) 自己の能力の不足に帰属する傾向が一層弱いであろう。そして前者は後者よりも被援助によって (c) 一層強い否定的感情と (d) 一層弱い肯定的感情とを抱き、また、援助者に対して (e) 一層非好意的な感情的態度と (f) 一層低い評価的態度を抱くだろう。したがって、このような体験の後 (g) 一層大きな自助努力を行うだろう。

仮説 4 統制可能性が高い状況、援助者が友人である場合、および被援助者の自尊心が高い場合、のように援助を脅威的なものにする条件が並存すればするほど、被援助者の (a) から (g) の防衛的反応、つまり自己の努力不足への強い帰属傾向と能力不足への弱い帰属傾向、援助や援助者に対する否定的な感情と態度、および大き

な自助努力という反応は、顕著になるだろう。

方 法

被験者

被験者は、K大学の学部学生500人（男性266人、女性234人）であり、以下の条件に無作為に割り当てられた。手続き

被験者は、ある場面の叙述とその内容に関する質問項目を含んだ小冊子を配付され、叙述された場面をよく読んだ後、質問に回答するように教示された。

1. 場面設定 「後期テストの時期が近づきました。あなたには、可能なら良い成績で修得したい科目があります。今度その科目で課題の提出が求められ、それを出すと成績が良くなるということです。期限が迫ってきたある日、あなたは何か参考になる本はないかと、図書館に行きました。」と記述することで、仮想場面が設定された。

2. 変数操作 独立変数のうち、統制可能性と社会的近接性は、次のように叙述された場面の内容を変えることで操作された。

a) 統制可能性 統制可能な条件では、課題を解くのにならうと良い本を見つけることができたので、自分一人で課題を仕上げるのが可能であると述べられ、他方、統制不可能な条件では、課題を解くのにならうと良い本を見つけることができず、自分一人ではとても課題を仕上げるのが困難であると述べられた。

b) 社会的近接性 近接性高条件では、大変親しい友人のAさんと図書館で出会い、課題をすでに終えていたAさんに助けてもらって課題を提出した、と述べられ、他方、近接性低条件では、一、二度話をしたことのある知人Bさんと図書館で出会い、課題をすでに終えていたBさんの助けを得て課題を提出した、と述べられた。

c) 自尊心尺度 被験者の自尊心の高さは、Janis & Field (1959) の自尊心尺度の日本語版（遠藤ほか、1974）を用いて測定され、その得点をメディアンカットすることによって、被験者は高自尊心と低自尊心の2群に分けられた。

3. 従属変数の測定 A（B）さんから助けられたときの感情反応を捉えるために、西川（1985）や西川・高木（1986）が用いたものを参考にし、被援助者がしばしば経験する感情として、うれしい、窮屈な、苦しい、ありがたい、恥ずかしい、くやしい、心地よい、憂うつな、独立的な、可能性のある、の10の項目が選定された。そして、5件法で評定することが求められた。つぎに、被

援助者の援助者に対する態度を捉えるために、知的な、公平な、良い、利己的な、つきあえる、好き、一緒に作業がしたい、の7項目が選定され、5件法で評定することが求められた。また、A（B）さんから助けを借りるようになった原因を推測させるために、「自分の能力不足」と「自分の努力不足」とが、それぞれどの程度あったと思うかを4件法で評定することが求められた。さらに、今後自助の努力をどの程度行うかを捉えるために、同じような場面にもう一度出くわしたとすれば、再びA（B）さんの力を借りて課題解決に取り組むつもりか否かが5件法で評定された。

結 果

従属変数の整理

1. 被援助者の感情反応 感情反応10項目の相関行列から主因子法によって感情因子を抽出した。さらにバリマックス法によって因子軸の直交回転を行い単純構造化をはかった。その結果、2つの共通因子を得た。その第1因子には、苦しい（.784）、憂うつな（.733）、窮屈な（.715）、不快な（.633）、恥ずかしい（.606）、くやしい（.584）が高く負荷しており、「憂うつ感」因子と名付けられた。第2因子には、ありがたい（.807）、うれしい（.636）が高く負荷しており、「感謝の気持」因子と名付けられた。これらの因子は、相川（1984）の心苦しさ因子と快適さ因子に、また西川・高木（1986）の憂うつさ因子と感謝因子に対応していると思われる。この結果は、援助が被援助者に否定的効果と肯定的効果の双方を生み出すという Fisher, Nadler, & Witcher-Alagna (1982) の指摘を支持している。つぎに、被験者ごとにこれらの感情反応の因子推定値が求められ、実験条件別に平均値が算出された（Table 1）。

2. 被援助者の援助者に対する態度 援助者への態度を測定するための7項目を主因子法によって因子分析し、2つの共通因子を抽出した。さらに、因子構造の単純化のために、バリマックス法による因子軸の直交回転を行った。第1因子に高く負荷する項目は、好き（.842）、つきあえる（.827）、一緒に仕事がしたい（.716）であり、第2因子に高く負荷する項目は、知的な（.686）、公平な（.643）、良い（.458）であった。そこで、第1因子は、「感情的態度」因子、第2因子は「評価的態度」因子と命名された。この2つの因子は、態度を構成する3成分のうち、感情的成分と評価的成分に対応していると思われる。つぎに、2つの対人態度因子の因子推定値が求められ、実験条件別に平均値が算出された（Table 1）。

従属変数の分析

1. 援助を必要とするようになった原因の帰属 被援助者が援助の原因をどこに帰属するかに及ぼす統制可能性、社会的近接性、そして自尊心の効果を明らかにするために分散分析が行われた (Table 2)。その結果、努力の不足への原因帰属では、統制可能性 ($F=28.17$, $df=1/492$, $p<.01$) と自尊心 ($F=4.66$, $df=1/492$, $p<.05$) の主効果が有意であった。また、能力の不足への原因帰属でも、同様に、統制可能性 ($F=22.61$, $df=1/492$, $p<.01$) と自尊心 ($F=14.91$, $df=1/492$, $p<.01$) の

主効果が有意であった。すなわち、統制可能性の高い状況よりも低い状況で、また自尊心の低い者よりも高い者が、被援助の原因を自己の努力不足と能力不足に一層強く帰属する傾向が認められた。

2. 被援助者の感情反応 被援助者の感情反応に及ぼす統制可能性、社会的近接性、および自尊心の効果を明らかにするために、感情の因子推定値が分散分析された (Table 2)。その結果、憂うつ感では、統制可能性 ($F=4.90$, $df=1/492$, $p<.05$)、社会的近接性 ($F=77.71$, $df=1/492$, $p<.01$)、そして自尊心 ($F=17.25$, $df=1/492$, $p<.01$) の主効果が有意であった。すなわち、統制可能性の低い状況よりも高い状況における方が、知人から援助を受けた者よりも友人から援助を受けた者の方が、さらに、自尊心の高い者より低い者の方が、一層強い憂うつ感を抱いていた。

援助を受けた者が感じる感謝の気持ちでは、統制可能性 ($F=36.00$, $df=1/492$, $p<.01$)、社会的近接性 ($F=25.02$, $df=1/492$, $p<.01$)、および自尊心 ($F=5.90$, $df=1/492$, $p<.05$) の主効果と、社会的近接性と統制可能性の交互作用 ($F=5.37$, $df=1/492$, $p<.05$) が有意であった。すなわち、統制可能性の高い状況よりも低い状況における方が、また知人からの援助よりも友人からの援助の方が、さらに、自尊心の低い者よりも高い者の方が、被援助者に一層強い感謝の気持ちを喚起したようである。さて、有意な交互作用は、統制可能性の高い状況において、知人から援助を受けた時に、特に感謝の気持ちが弱いことから生み出された。

3. 援助者への態度 被援助者が援助者に対して抱く態度に及ぼす統制可能性、社会的近接性、および自尊心の効果を明らかにするために、分散分析が行われた (Table 2)。その結果、被援助者の援助者に対する感情的態度では、社会的近接性の主効果 ($F=114.18$, $df=1/492$, $p<.01$) と、社会的近接性と統制可能性との交互作用

Table 1 被援助者の反応の平均値

	統制可能性 自尊心 社会的近接性	高		低	
		高	低	高	低
被験者数	友人	67	58	62	63
	知人	62	63	67	58
努力の不足	友人	3.060	2.638	3.290	3.333
	知人	2.871	2.714	3.254	3.103
能力の不足	友人	2.343	2.017	2.742	2.381
	知人	2.226	2.048	2.716	2.328
憂うつ感	友人	0.279	0.520	0.055	0.493
	知人	-0.310	-0.142	-0.628	-0.225
感謝の気持ち	友人	0.097	-0.004	0.400	0.221
	知人	-0.358	-0.606	0.203	0.032
感情的態度	友人	0.408	0.450	0.293	0.441
	知人	-0.624	-0.426	-0.291	-0.246
評価的態度	友人	0.048	-0.288	0.094	-0.085
	知人	-0.047	-0.077	0.384	-0.086
自助努力	友人	2.642	2.655	2.516	2.508
	知人	3.306	3.270	3.075	2.862

Table 2 被援助者の反応の分散分析

変動因	df	努力の不足		能力の不足		憂うつ感		感謝の気持		感情的態度		評価的態度		自助努力	
		MS	F	MS	F	MS	F	MS	F	MS	F	MS	F	MS	F
統制可能性 (A)	1	22.089	28.17**	18.518	22.61**	3.454	4.90*	23.227	36.00**	1.185	1.71	3.606	5.60*	6.405	7.38**
社会的近接性(B)	1	1.133	1.45	0.223	0.27	54.729	77.71**	16.144	25.02**	78.958	114.18**	1.277	1.98	37.756	43.52**
A × B	1	0.152	0.19	0.002	0.00	0.175	0.25	3.463	5.37*	3.252	4.70*	0.288	0.45	1.021	1.18
自尊心 (C)	1	3.651	4.66*	12.245	14.95**	12.146	17.25**	3.809	5.90*	1.461	2.11	7.997	12.43**	0.462	0.53
A × C	1	0.040	0.05	0.112	0.14	0.90	0.13	0.148	0.23	0.023	0.03	0.002	0.00	0.504	0.58
B × C	1	1.730	2.21	0.470	0.57	1.451	2.06	0.000	0.00	0.017	0.02	0.620	0.96	0.304	0.35
A × B × C	1	1.637	2.09	0.241	0.29	0.011	0.02	0.183	0.28	0.527	0.76	1.386	2.15	0.186	0.21

($F=4.70$, $df=1/492$, $p<.05$)が有意であった。すなわち、知人よりも友人から援助を受けた者の方が、その援助者に対して一層好意的態度を抱いていた。さて、有意な交互作用は、統制可能性が高い状況で知人から援助を受けた者が、特に、援助者に好意を抱かなかったことから生み出された。

被援助者が援助者に対して抱く評価的態度では、統制可能性 ($F=5.60$, $df=1/492$, $p<.05$) と自尊心 ($F=12.43$, $df=1/492$, $p<.01$) の主効果が有意であった。すなわち、統制可能性の高い状況よりも低い状況における方が、また、自尊心の低い者より高い者が、援助者を一層知的で公平な人と評価した。

4. 今後の自助努力 今後、同じような困難に直面した時の自助努力に及ぼす統制可能性、社会的近接性、そして自尊心の効果を明らかにするために分散分析が行われた (Table 2)。その結果、統制可能性 ($F=7.38$, $df=1/492$, $p<.01$) と社会的近接性 ($F=43.52$, $df=1/492$, $p<.01$) の主効果が有意であった。すなわち、統制可能性の低い状況よりも高い状況における方が、また、友人からよりも知人から援助を受けた者の方が、一層強く自助努力の意図を示した。

被援助者の反応過程の分析

被援助者の反応傾向から独立変数と従属変数との間の因果関係を明らかにするために、重回帰分析が行われた (Table 3)。その結果、努力不足への原因帰属では、統制可能性 ($-.420$) と自尊心 (.170) が、また、能力不足への原因帰属では、統制可能性 ($-.384$) と自尊心 (.314) が、有意な直接効果を及ぼしていた。

被援助者の感情反応に及ぼす3つの独立変数、および原因帰属の効果を見れば、憂うつ感に対しては、社会的

近接性 (.678)、自尊心 ($-.293$)、および努力不足への原因帰属 ($-.116$) の直接効果が、他方、感謝の気持ちに対しては、統制可能性 ($-.349$)、社会的近接性 (.349)、および能力不足への原因帰属 (.173) の直接効果が有意であった。

援助者への態度に及ぼす3つの独立変数、および原因帰属の効果を見れば、感情的態度に対しては、社会的近接性 (.514)、憂うつ感 (.218)、および感謝の気持ち (.373) が、他方、評価的態度に対しては、社会的近接性 ($-.271$)、自尊心 (.154)、努力不足への原因帰属 (.091)、能力不足への原因帰属 (.231)、および感謝の気持ち (.238) が、有意な直接効果を及ぼしていた。なお、統制可能性は、感情的態度に対して、感謝の気持ちを媒介にして、間接効果 ($-.130$) を及ぼしていた。

被援助者の自助努力に対する3つの独立変数の直接効果は、いずれも有意ではなかったが、憂うつ感 ($-.324$)、感謝の気持ち ($-.230$)、そして感情的態度 (.184) は有意な直接効果を及ぼしていた。なお、自助努力に対する独立変数の間接効果を見れば、社会的近接性が、憂うつ感 ($-.220$)、感謝の気持ち ($-.080$)、そして感情的態度 ($-.095$) を媒介にして、影響を及ぼしていた。

考 察

統制可能性の高低が被援助者の反応に及ぼす1つの効果として、援助を必要とするようになった原因の帰属の仕方に差異が見出された。この結果は、仮説1 (b) を支持していたが、仮説1 (a) を支持せず、むしろ仮説とは逆方向であった。すなわち、統制可能性の低い状況にあるよりも高い状況にある被援助者は、援助を得るよ

Table 3 被援助者の反応の重回帰分析結果 (標準偏回帰係数と重相関係数)

外的基準 説明変数	努力の不足	能力の不足	憂うつ感	感謝の気持	感情的態度	評価的態度	自助努力
統制可能性	-.420**	-.384**	.116	-.349**	-.048	.044	.155
社会的近接性	.100	.040	.678**	.349**	.514**	-.271**	-.103
自尊心	.170*	.314**	-.293**	.120	-.117	.154**	-.016
努力の不足			-.116*	.041	-.002	.091*	.038
能力の不足			-.001	.173**	.049	.231**	-.076
憂うつ感					.218**	.095	-.324**
感謝の気持					.373**	.238**	-.230**
感情的態度							-.184**
評価的態度							.047**
R^2	.065**	.071**	.183**	.162**	.354**	.230**	.288**

うになった原因を自己の能力不足にも努力不足にもあまり帰属しなかった。統制可能性が高い状況とは、被験者が、図書館で熱心に努力して有用な参考書を発見し、自分の能力で課題を解決できる見通しを持っていた状況である。したがって、解決への見通しを持っていながら、援助を受けた者は、被援助原因を自分の努力や能力の不足には帰属しなかったであろう。

統制可能性が被援助者の否定的感情と肯定的感情に及ぼす効果はいずれも有意であり、仮説1の(c)と(d)は検証された。すなわち、自分で課題を解決できると認知しながらも援助を受けた者は、解決できないと認知した者よりも、援助を一層自己脅威的と見なし、否定的感情を強く抱き、肯定的感情をあまり強く抱かなかったと考えられる。

統制可能性は、被援助者が援助者に対して抱く態度のうち、評価的態度に対して有意な効果を及ぼしており、仮説1(f)が検証された。すなわち、統制可能性の低い状況の被援助者は、高い状況の者よりも、援助を一層自己支持的と捉えたため、援助者を一層高く評価したと思われる。しかし、援助者への感情的態度では、統制可能性の高低によって有意差がなく、仮説1(e)は支持されなかった。その理由は、統制可能性と社会的近接性の交互作用が感情的態度において有意であったことと関連している。すなわち、援助者が知人の場合、仮説どおり、統制可能性が低い状況の被援助者の方が、高い状況の者よりも、援助者に対して一層好意的な感情的態度を抱いたが、逆に、援助者の友人の場合、統制可能性が高い状況の被援助者の方が、低い状況の者よりも、援助者に対して一層好意的な感情的態度を抱いた。すなわち、知人の場合と友人の場合とで統制可能性の効果の方向が異なっていた。援助者が知人の場合、解決への見通しがありながらも他者に助けを借りるという事態は、被援助者にとって一層自己脅威的であったのだろう。他方、援助者が友人の場合、被援助者は、自分で解決できそうであるにもかかわらず援助を受けることで、憂うつ感を抱きつつも、それまでに好ましい感情の交流を維持してきた相手には一貫した相手への好意を覆すことはなく、積極的に助力を申しでてくれた友人に一層強い好意を持ったのであろう。したがって、社会的近接性の各条件での統制可能性の効果が互いに相殺された結果、主効果が有意にならなかったと考えられる。

統制可能性が自助努力に及ぼす効果は有意であり、仮説1(g)は検証された。つまり、自分で解決できる見通しを持っている課題で他者から援助を受けた者は、自分ではとても解決できそうにない課題で他者から援助を

受けた者に比べて、自尊心への脅威を強く感じた結果、今後の自分の苦境を独自の力で乗り越えるよう一層動機づけられたのであろう。

次に、仮説2(a)～(g)にしたがって、援助を受けた原因の推測、否定的感情と肯定的感情、感情的態度と評価的態度、そして自助への努力に及ぼす社会的近接性の効果を検討した。その結果、努力不足と能力不足に及ぼす社会的近接性の効果は、いずれも有意ではなく、仮説2の(a)と(b)は検証されなかった。しかし、被援助者の否定的感情に及ぼす社会的近接性の効果を見たところ、友人から援助を受けた者は、知人から援助を受けた者に比べて、極めて強い憂うつ感を抱いており、仮説2(c)は検証された。

被援助者は、知人よりも友人を、態度や価値観がより一層自分と類似した存在とみなすであろう。しかし学業に関しては、彼らは被援助者と同じ大学で同じ科目を受講する学生であり、人間の基本的能力に大きな違いはないと判断されたのだろう。その結果、援助を必要とするようになった原因の帰属に、社会的近接性による差異が認められなかったと考えられる。このように社会的近接性は、認知的帰属のレベルでは有意な効果を及ぼさなかったが、感情反応のレベルでは有意な効果を及ぼした。Nadler & Fisher (1986)によれば、援助されることが被援助者の無能さを示すような場合、人は知人よりも友人を社会的比較の対象にしやすい、そのために、被援助者は、友人からの援助を自己脅威的なものと捉えがちであるという。また Nadler, Fisher, & Ben-Itzhak (1983)も友人からの援助が知人からの援助に比べて自己脅威的であることを示した。本研究で検証された憂うつ感に及ぼす社会的近接性の効果は、これらの知見と一致していた。

他方、被援助者の抱く肯定的感情、すなわち感謝の気持ちでは、社会的近接性の主効果が有意であったが、援助に対して抱く感謝の気持ちは友人よりも知人の場合の方が一層弱く、仮説とは逆方向であり、仮説2(d)は検証されなかった。特に、自分で課題を解決できる見通しを持ちながらも、知人から援助を受けた場合、被援助者は、相手の援助をお節介なものとして捉えたためか、援助者に対して最も弱い感謝の気持ちしか抱かなかった。この交互作用が、仮説2(d)で予測したものと逆方向の結果を生み出した理由の1つであると考えられる。

さて、援助者に対する態度に及ぼす社会的近接性の効果は、感情的態度では有意であったが、仮説2(e)で予測したものと逆方向の結果であった。また、社会的近接性の効果は、援助者への評価的態度でも有意でなく、

仮説2 (f) は支持されなかった。被援助者は、援助者が友人の場合、知人の場合よりも、相手が自分に対する好意から援助してくれたと推測し、その結果、彼らは互恵的に、援助者に対して一層好意的な感情的態度を持ったと思われる。他方、評価的態度では有意差が見られなかったが、援助行動は、それ自体、社会的に高く評価されるものであり、そのために、援助者が友人であろうと知人であろうと、価値の高い行動をとった者に対して、等しく高い評価の態度を形成したのであろう。なお、この結果は、援助者に対する高い評価が直接的に相手への好意的感情に結びつくわけでないことを示唆している。

自助努力については、知人から援助を受けた者の方が、友人から援助を受けた者に比べて、今後の苦境を自分の力で乗り越えるように一層強く動機づけられていた。したがって、結果は、仮説と逆方向にあり、仮説2 (g) は検証されなかった。被援助者は、援助者が知人の場合に、さほど強い憂うつ感を抱かないが、感謝の気持ちも弱く、援助者に対して好意的態度を持たなかった。このような経験は、全体的には自己脅威的である。したがって、被援助者は、友人の場合よりも知人の場合に、一層強い自助努力を意図したと考えられる。

Fisher ら (1982) は、援助が自己脅威的ならば、被援助者は否定的感情を抱き、逆に自己支持的ならば肯定的感情を抱くと予測した。しかし本研究の結果は、そのような援助の性質と被援助者の感情との対応性を示さず、たとえ援助が自己脅威的であっても、援助者との関係性によっては肯定的感情を喚起することのあることを明らかにした。また、今後の事態での自助努力に関しては、被援助者の自助努力が統制可能性の高い場合に一層強まるという自尊心脅威モデルの予測が支持された。ところが、自助努力は、友人からの援助よりも知人からの援助においてより強く、この結果は、自尊心脅威モデルの予測を支持しなかった。被援助者は、友人から援助を受けた場合、強い憂うつ感を経験した。このことは、友人からの援助が自己脅威的要素を多く含むことを意味する。しかし、仮説とは逆に、自助努力は、友人よりも知人から援助を受けた場合により一層強まったのである。この結果は、自助努力が自尊心の脅威のみに規定されるのではないことを示唆している。本研究の結果において、友人からの援助は、Nadler & Fisher (1986) が述べるように、自己脅威的意味を含むものであったが、同時に、一貫した自分への好意的態度のあらわれといった自己支持的意味も十分に含んでいたようである。この観点から結果を見れば、友人から援助を受けた者は、今後も気楽に援助者に依存できる、安定した友人関係を期待したと

推測できるだろう。一方、知人から援助を受けた者は、全体的に援助を自己脅威的に捉えており、特にこの傾向は、統制可能性の高い状況で強かった。被援助者は、自力で十分解決できる課題について、援助を申し出た知人を疎ましくさえ感じたのかもしれない。したがって、彼らは、今後はできるだけ知人からの援助を避けることを意図したと考えることができる。

自尊心と被援助の原因帰属との関係について見れば、努力不足への原因帰属に及ぼす自尊心の予測された効果 (仮説3 a) は確認されたが、能力不足への効果 (仮説3 b) は確認されず、自尊心の高い人が、むしろ低い人よりも、能力不足が援助の原因であると考ええる傾向が強かった。被験者の課題は、自己の能力を発揮することによって、または図書館で参考書を見つける努力によって、十分解決される。ところが、被援助者は、その解決に他者の援助を必要としたのである。その結果、自分の能力や努力を高く評価する者の方が、自分の力を発揮しなかったために援助を必要とする事態に陥ったと痛感したのであろう。したがって、自尊心の高い者は、低い人よりも、一層被援助の原因を自分自身に帰属したと考えられる。

被援助者の感情反応に及ぼす自尊心の効果は、否定的感情と肯定的感情との双方で有意であったが、予測された方向とは異なっており、仮説3の(c)と(d)は支持されなかった。すなわち、自尊心の低い者が、高い人よりも、否定的感情を一層強く、そして肯定的感情を一層弱く抱いていた。被援助者が援助者に対して抱く態度では、評価的態度においてのみ自尊心の主効果が有意であったが、仮説の方向とは異なっており、仮説3の(e)と(f)も支持されなかった。つまり、自尊心の低い者の方が援助者を一層不公平で知的でないとして評価していた。さらに、自助努力に及ぼす自尊心の効果は、有意でなく、仮説3 (g) も支持されなかった。

本研究の結果から、自尊心の高い人の方が、援助を必要とするようになったことの責任を自分自身に一層帰属することが分かった。したがって、自尊心の高い人は、低い人に比べて、援助されることで一層自尊心への脅威を経験したと推測される。しかしこの研究では、自尊心の高い人の憂うつ感は、自尊心の低い人よりも弱かったのである。日常の活動を通じて高い自己評価を形成していると考えられる自尊心の高い人は、一度や二度自分の力不足のために援助を受けても、自尊心の低い人ほどにはそのことで自尊心の低下を感じなかったのだろう。あるいは、本研究で設定した事態が、自尊心の高い人に脅威を感じさせるほど、十分に深刻なものではなかったの

かもしれない。確かに、被験者にとって学業成績は決して無関心な対象ではないし、自己概念の中核に位置づける者は多いだろう。しかしまた、現代の青年にとって、学業成績以上に自己概念の中核に位置する対象は数多くあると思われる。自尊心に関する仮説の多くが検証されなかったことは、我々が場面設定の適切さについて再検討しなければならないことを示唆している。いずれにしても、自尊心の高低と被援助者の感情反応あるいは自助への努力との関係については、今後さらに検討を加えねばならない。

仮説4について、感謝の気持ちと感情的態度で、統制可能性と社会的近接性との有意な交互作用があったが、いずれも仮説を支持するものではなかった。この研究で、3つの独立変数は、自尊心の脅威に対して、予測とは逆方向の影響を生み出したり、予測以上に複雑な影響を及ぼすことが明らかにされた。したがって、予測された方向での変数の交互作用が、直接的に援助の自己脅威性を強めることはなかった。

独立変数である事態の統制可能性、援助者と被援助者の間の社会的近接性、および被援助者の自尊心が、援助を必要とするようになった原因の帰属や被援助者の感情と援助者への反応を経て、自助努力に影響を及ぼす過程を明らかにするために、3つの独立変数と、援助を必要とするようになった原因の帰属、被援助者の感情反応、援助者への態度、そして後の自助努力との間の因果関係が重回帰分析によって明らかにされた (Table 3)。

能力不足と努力不足への原因帰属では、自尊心と統制可能性が有意な効果を及ぼしていた。これらの結果は、分散分析の結果と対応していた。

被援助者の抱く憂うつ感には、社会的近接性と自尊心、そして努力への帰属が有意な直接効果を及ぼしていた。憂うつ感に対する2つの独立変数の効果は、分散分析の結果と一致していた。しかし、分散分析で有意であった統制可能性の効果は、重回帰分析では有意でなかった。そこで、統制可能性の憂うつ感に及ぼす間接効果を見れば、それほど大きくはないが、努力不足への帰属を媒介とした間接効果が見られた。事態を自分で解決できる見通しを持っている者ほど、援助されることによって憂うつ感を抱くが、この傾向は、援助されたのは自分自身の努力不足によると推測することで一層強められたのであろう。

感謝の気持ちに及ぼす有意な直接効果は、統制可能性、社会的近接性、および能力不足への帰属であり、分散分析の結果とほぼ対応していた。もっとも、自尊心の直接効果は有意でなく、分散分析の結果とは異なっていた。

しかし、自尊心は、能力不足への帰属を媒介として、感謝の気持ちに影響を及ぼしており、自尊心が感謝の気持ちに及ぼす直接効果と間接効果とが分散分析での自尊心の有意な主効果を生み出したと考えられる。

被援助者が抱いた援助者に対する態度について結果を見れば、感情的態度には社会的近接性、憂うつ感、および感謝の気持ち、また評価的態度には社会的近接性、自尊心、努力不足と能力不足への帰属、および感謝の気持ちが、有意な直接効果を及ぼしており、独立変数の効果を検証した分散分析の結果に概ね対応していた。ただし、分散分析では、評価的態度に及ぼす統制可能性の効果が検証されたが、重回帰分析の結果では、この変数の直接効果は弱かった。そこで、統制可能性の評価的態度に及ぼす間接効果を検討したところ、能力不足への帰属を媒介とした効果が強かった。つまり、自分自身で課題を解決する見通しを持っていない者ほど、能力不足のため援助を受けたと推測し、その結果援助者を一層高く評価したと考えられる。また、援助者が友人よりも知人の場合、被援助者は援助者を一層高く評価したが、しかし、逆に、彼らは非好意的な感情的態度を一層強く抱いていた。援助行動は社会的に意義深い行為であり、その行為がそれほど親しくはない知人に対して行われたならば、援助行為や援助者に対して、特に、高い評価が与えられるだろう。もっとも高い評価が、決して好意的感情に直接結びつくわけではないことを、結果は示した。

自助努力に及ぼす有意な直接効果は、被援助者の抱く憂うつ感、感謝の気持ち、および援助者への感情的態度であり、分散分析で検証された独立変数の直接効果は、重回帰分析では明らかにされなかった。そこで各独立変数の自助努力に及ぼす間接効果を検討したところ、特に、社会的近接性が、憂うつ感と感情的態度を媒介して、極めて大きな間接効果を及ぼすことが分かった。つまり知人よりも友人から援助を受けた者は、一層強い憂うつ感を抱くと同時に、援助者に対して好意的態度を持ち、その結果、今後はその友人に迷惑をかけることのないように、自力で事態を解決できるように努力する、という心理的過程が、本研究で明らかにされた。ただし、原因帰属や感情反応に対する重回帰分析の決定係数は、有意ではあっても、値自体は決して高くない。したがって、他の外性、内性変数を考慮に入れた新たな研究計画の検討が必要であるかもしれない。

以上、Fisherら(1982)の自尊心脅威モデルの検討を中心に、結果を考察した。本研究の結果から、事態の統制可能性が高ければ高いほど、被援助者は援助を必要とするようになった原因を自分自身に帰属し、一層強く憂

うつ感を抱き、援助者を一層低く評価し、そして今後の自助への努力を一層熱心に試みることが明らかになった。また、友人から援助を受けた者が、知人から援助を受けた者よりも一層強い憂うつ感を抱くことが分かった。これらはいずれも自尊心脅威モデルを支持する結果であった。

しかし、肯定的感情や自助努力に及ぼす社会的近接性の効果および否定的感情や自助努力に及ぼす被援助者の自尊心の効果は明らかにされなかった。このことについて、我々は今後その原因を究明しなければならない。

また、本研究は、自尊心脅威モデルの妥当性検討の第一歩であるため、このモデルの中心の変数である統制可能性と社会的近接性、および援助の自己脅威性の認知に重要な影響を及ぼす自尊心の効果の検討を目的とした。しかし、従来、女性の被援助者よりも男性の被援助者の方が、援助を一層自己脅威的に捉える傾向が認められており、(DePaulo, 1978)、本研究の結果にもこの傾向が含まれている可能性はある。今後被援助者の性別が自尊心への脅威の程度や自助努力に及ぼす影響を明らかにすることが求められている。

本研究では、自尊心脅威モデルの有効性を支持する結果が、部分的に見出された。しかし、このモデルの妥当性について結論を導き出すには、さらに多くの研究が必要である。被援助者の個人的特性や援助の状況特性が自尊心に脅威を及ぼす影響の検討や自尊心への脅威を含めた諸要因と自助努力との関係の究明など、早急に解明しなければならない課題が多く残されている。

引用文献

- 相川 充 1984 援助者に対する被援助者の評価に及ぼす返報の効果 心理学研究, 55, 8-14.
- Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: Freeman.
- DePaulo, B. M. 1978 Accuracy in predicting situational variations in help-seekers' reactions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 330-333.
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1974 Self-Esteem の研究 九州大学紀要, 18, 53-65.
- Fisher, J. D., Nadler, A., & Whitcher-Alagna, S. 1982 Recipient reactions to aid: A conceptual review. *Psychological Bulletin*, 91, 27-54.
- Greenberg, M. S. 1980 A theory of indebtedness. In K. Gergen, M. S., Greenberg, & R. Willis (Eds.), *Social exchange: Advances in theory and research*. New York: Plenum.
- Janis, I. L., & Field, P. B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland & I. L. Janis (Eds.), *Personality and Persuasibility*. New Haven: Yale University Press, 55-68.
- Nadler, A., & Fisher, J. D. 1986 The role of threat to self-esteem and perceived control in recipient reactions to aid. Theory development and empirical validation. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 19), 81-123. New York: Academic Press.
- Nadler, A., Fisher, J. D., & Ben-Itzhak. 1983 With a little help from my friend: Effects of single or multiple act aid as a function of donor and task characteristics. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 310-321.
- Nadler, A., Fisher, J. D., & Streufert, S. 1976 When helping hurts. The effects of donor-recipient similarity and recipient self-esteem on recipient reactions to aid. *Journal of Personality*, 44, 392-409.
- 西川正之 1985 補償的返礼行動に及ぼす加害の程度と援助意図性の効果 実験社会心理学研究, 24, 161-165.
- 西川正之・高木 修 1986 援助に対する返礼行動の研究 (I) 被援助経験の有無と援助意図性の効果 社会心理学研究 2, 11-16.
- 鹿内啓子 1978 成功・失敗の帰因作用に及ぼす self-esteem の影響 実験社会心理学研究 18, 35-46.
- Walster, E., Walster, G. W., & Berscheid, E. 1978 *Equity: Theory and research*. Boston: Allyn & Bacon.

〔1990年3月31日 受稿〕
〔1990年8月6日 受理〕